

幼児が開いた“座談会”



赤羽美代子

私の勤務するR園の所在地は、東京港区の静かな高台に位置する。

区内には、区立25園、私立24園が存在する。区内の区・私立園の園児数は、この2・3年間に、共に著しく減少した。81年度には（4歳児）更に減少し、応募者数が一桁の園も少なくない。しかも、3園合わせて、やっと2桁という現実である。

R園は、一と昔前より、極度の園児の減少を見ている。理由は幾つかあるが、この地域の社会的な現象面から捉えるならば

- 10年来、地域の地区再開発の問題が進められ、園の周囲の家屋は、空き家となり、町民の居住者は減少した

- 近隣の各、小学校に幼稚園が併設された
- 園の周囲には、官庁街・各国大使館、又、長年の間に、大ホテル、高層ビル等が林立した。

以上のような問題を抱えた園であるが、毎年、区外より通園する園児が数を占め、

園児数は少ないが、結構、男女のバランスを保ち、幼児の為には良い人数であると、保育者は、ささやかな保育に励んでいる。

長年に渡る、小人数保育に馴れた者として本年度の極度の減少に、今更の驚きは無いのだが、毎年、新入園児の募集時になると、私の脳裏に一と声はつきりと叫ぶ幻がある「保育内容を変えなさい。親の要求を入れ、勉強を教えなさい。園児数の獲得には、それが一番よろしい」

その叫びは、力ある者の如くに私を揺さぶって馳け足で去来する。そして、その事が成功した実例も、幾つか聞かせてくれる。幻は、時には姿を変え、趣向を変えては、幻なりの、幼児獲得とやらの、奥伝の秘法伝授に、私をしつこく追い回すのである。

そんな或る日、幼児の遊びの一つ一つの中から幼児が生かされる条件が、訴えられ語りかけられている、遊びの姿を見て、新しい感動を覚えた。

この幼児の「訴え」を、幼児が開いた座談会と仮定して、まとめてみようと思う。

司会者Ⅱ年長児A子。書記Ⅱ年長児B夫。

話し合い題。第一回「幼児減少についての保育の取り組方。幼稚園の今後の姿勢」

参加者ⅡR園児、年長組・年中組・年少組。全園児。

A子「皆さん、今日は幼児にとって、重大、かつ、深刻な問題として、緊急に集まっていたございました。3歳児のお友だちには、難かしい内容ですが、一生懸命に考え下さいね。」

しかしかの事で、R園も園児数が、年年減少しています。先生方も心配しておられます。私たちは、毎日こんなに楽しくR園で生活をしているのに、昨日、こんな話を先生にしていた人がいました。C夫さん、その話を皆さんに話して下さい」

年長児C夫「はい。幼稚園に来た業者のおじさんでした。先生に『保育内容に特徴をつけて、それを宣伝しなさい。当社は、素晴らしいワーク・ブックを開発しました。それは、押しつけずに、幼児が自発的に楽しく勉強する内容です。幼児には一冊ずつ持たせ、おか様には、それを見せながら相談のつて上げれば、目に見えた成果が上がるので、喜ばれますよ』と、先生に話していました」

年中児D子「先生は、ワーク・ブックを使う事にしましたか？」
C夫「いいえ。先生は断りました『保育内容は、今迄通り変えません。幼児たちは、遊びの中で工夫し自分で物を考え、びつくりするような事を発見しますよ』と話していました。おじさんは『先生、良く分りますが、これからは、それは理想ですよ。園児がいなくなりますよ』と云って帰りました」

年長児I夫「一体、私たちを、幼児獲得の道具と考えているのでしょうか？」

一同頷き、悲しい顔になる。

A子「あら、年中組のU子ちゃん、カイガンを裏返しに着てますよ」

U子「アハハハ。これで良いの」

年少児E子「どうして良いの？」

U子「脱いだ時、表になるからよ表に着るとき、脱いだら裏になるもん。そうしたら袖に手を入れて表に直している間に、皆が遊びに行っちゃうから」

E子「ソーカー」と感心する。

全員、笑う「アハハハ」

D子「それ、誰が教えてくれたの？」

U子「うん脱いだ時、これが良いって、自分で考えたの」

年少児Y夫「僕のことね、Jちゃん打たなくなつたよ」

年中児M子「先生から『Jちゃん！物を打げないで』って云われなくなつたの

は、Jちゃんが良い子になったからなの」

注 II Jは年長児。男児。自己中心的な遊

びを好み、泣き叫び、物を打げて訴える
(最近大分落ち着く) J自身が、友だちとの
関わり方を知り、遊びの発展を工夫し、満
足感が得られる経験を積むよう、教師は指
導するさい、Jは将来、必ず、事態を正確
に掌握し、決断をする能力が十分にある子
と信じて(信じる事は、不可能と思う事を、
待つ事と思う)「Jちゃん、Jちゃん」の
名前の連発はせぬ事にした。現実のJは、
落ち着いてきたとは云え、心の大騒ぎが、
時どき破裂する。

しかし、子どもたちは、教師がJの名を
連発しない事実を知って、これは「Jちゃ
んが良い子に変身したからなのだ」と理解
し、Jを認めた。Jは、友だちに誉められ
た事で、顔を輝かせて、喜ばしさで一杯で
ある。

教師は日頃、観念とか、論理とかいう方
法で、Jとの関わりが多くあったのかも知
れない。対象であるJに即して問題を探
し、頭でなく、身体全体の関わりが、まだ
まだ、たりなかった事を反省する。

A子「先日、先生方と教会の幼稚園理事
のおじさん、おばさん方と、今後の幼稚園
の存続について話し合いました。私も出席
しましたので、報告いたします。先ず、現
在の幼稚園の実状が報告されました。次に
。教会付属幼稚園は、従来の保育を変えて
も、園児数を増す方針をとるか

。神様の御業の一端として園児が極度に減
少しても存続するか。

話し合いました。今後、その問題の話
し合いが続けられますが、教会の願いと
して、背後より、幼稚園の支えとなり、園
は、ひとりひとりを大切にする保育に努力
する「方針だそうです」

幼児全員、拍手。パチパチパチ。全員笑
顔。

年中児F夫「月謝も、だんだん高くなる
のでしょう?」

年少児G子「パパとママが、お金が、し
ゅくに、なくなるって」

年中児H夫「障害を持った子のおかあさ
んが『月謝を皆さんより高く支払いましょ
うか?』と先生に聞きました。先生は『皆
同じに神様に愛されている子どもです。特
別な月謝はいりません』と答えていまし
た。それでも、全員、4月からの月謝は高
くなるらしいですよ」

子ども全員「やっぱりー」一同頷き、笑
顔消える。

A子「それでは、第1回の幼児座談会
は、これで閉じます。近く第2回めの話し
合いの会を開き、先生方や、幼稚園理事の
皆様にも出席していただきましょう。私た
ち、現実社会から外れた場所で生きている

幼い者が、厳しい社会の現実の中で、どう、生かされたいか、話し合いたいと思います。皆様、御苦労様でした。

一同拍手。解散。(書記B夫)

この内容の一つ一つは、子どもたちの遊びの中に、滲み出ている。

幼児減少時代に入り、現実には厳しい。経営面が優先されなければ、その舟は出帆する事は難かしい。しかし、その一面のみで補えるならば、保育の内容を、歪めなくてはならぬ事態が生ずる。保育の理想を貫くとするならば、かなりの教師の決断と信頼と、実力が要求される。

しかし、どちらを選ぼうとも、常に変わらぬ対象者は、ひとりひとりの幼児である。保育者は、この一点を見つめて、何が起ころうと、「この事は、幼児にとって、何なのか？」に、戻していかなければと考え

ている。幼児獲得の為に、ひとりひとりをお利口にしたたりお行儀良くしたりする教育に力を入れて、結果的には、幼児が園の発展の為の材料に用いられる事のないよう、心せねばならない。

お行儀の良いマナーが、お利口になる事が拘わる相手が、「幸せを感じる」からという発想は、自分が受け入れられ、人間として扱われた経験を持った者が、そのマナーも、利発さも、生きて働く、行動になる事と思う。

これらの事態を踏まえて、或る時は揺さぶられ、或る時は、心、千々に迷える時、保育者は、原点に拠って立ち、しっかりと土台を見据えて、子どもを見る目を一とまわり大きくし、子どもの近くで、育てられていく保育者でありたいと願っている。

他に、幼児減少について、経営面からの御意見も、掲載されると思われるので、私

なりに、現場にある者として、最後まで貫きたい保育の姿勢を述べてみました。

